
生活魔術士見習いカケル！

七夏 香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生活魔術士見習いカケル！

【Zコード】

Z8562L

【作者名】

七夏 香

【あらすじ】

生活魔術。それは日常生活を楽に豊かにする魔術。紋章魔術専門の魔術士見習いカケルは、師匠の遺志を継ぎ「生活魔術で日常生活を豊かにする」と決意。更なる知識を得るために故郷を出て、魔術学校がある王都への旅に出ることにする。攻撃魔術が使えない危険な旅。お供に友達の狼犬と、旅の途中で出会った寡黙で妙な剣士。剣と魔法の中世異世界ファンタジーです。

第1話・生活魔術士見習い、決意する（前書き）

初投稿作品です！

第1話・生活魔術士見習い、決意する

「明日には立ち退け、か。あの『ゴリゴリ魔術士』め

カサカサと乾いた葉ズレの音が響く人気の無い場所で、敬愛する師匠の墓前でカケルは独り言を吐き出した。

森の木々は緑色から落ち栗色に変り始め、風は肌寒さを運ぶ。身震いひとつし、両手一杯に抱えた師匠の好きな秋の花を、パサパサと大木の根元に落とした。

家のそばの大きな樺の木を墓石代わりにして欲しいと師は願った。今は木の根元で眠っている。病氣という病氣にからず、老衰で人生を閉じた。志は半ばだつたが大往生だと微笑んでいた。

後のことを考え、師匠が所持していた貴重な品々はすでに隠し地下倉庫へ封印されている。あの傲慢で強欲な魔術士は隠さなかつた品々で満足するだろう。

師匠と共に過ごした家を明日には出なければならない。「あの『ゴリゴリ魔術士』に家を追い出されたのだ。立ち退き期限は明日だつた。

村の人たちの中には師匠に恩がある人が多い。身を寄せる家もあつたかもしれないが、カケルは村を出ることにした。

村を出て、王都にある魔術学校で魔術を学ぶのだ。決意は固かつた。残り準備をするためにカケルは家に入つていった。

が、すぐ出てきた。

腹がたつてあの魔術士のことを考え続け時間がたつのも忘れないが、お腹は空くものだった。カケルと師匠が住む家は、村の家々

が建つ場所より高い場所に建つていて遠かつた。足首まである麻のスカートをうつとおしそうに持ち上げながら、ブチブチと呴きながら村へ下つて歩いて行つた。

「おうーい、モエギい。ご飯だよー！」

山道を下りながら、周りに広がる森を切り開いて造られたヤギの牧草地へ大声を出す。『ウォン』と応える鳴き声がして、追い立てられたヤギと一緒に少女より大きい狼犬が現れた。陽光に照らされた毛は深緑色で耳はピンと立つていて、狼犬は昼寝をしていたヤギを飼いへヤギたちを追いやり、カケルの側にやつて来た。尻尾を振りながらお座りし田をくりくりさせカケルを見上げる。

「モフモフ～モエギい～。モフモフモエギい～！」

溜まつた鬱憤を晴らすように、グリグリとしばらく冬毛に頬ずりした後、気が済み歩き出す。モエギは心得た様子で真横について歩いた。カケルが4歳のとき師匠が子犬のモエギを連れてきた。それ以来一緒に育つた友達で心強い護衛モエギは、放牧の手伝い以外はほとんど側にいる。師匠が亡くなつた今唯一頼れる存在になつた。

村の入り口から中央噴水広場と一番奥の村長宅を結ぶ石畳の道に沿つて建つ家々を回つて、昼ごはんと晩御飯を調達する。今日は何所も無料してくれた。山羊ムグの生肉はモエギに。燻製肉はナイフで切り分けて黒パンを一緒によく噛んで飲み込む。大抵の食べ物は噛み碎けると、微妙な気持ちで誇つていた。

カケルが住むミカーゴ村では本来は黒パンの原料である黒麦は育ちにくいが、カケルの師匠であるマルス・リングソーが土壌と黒麦の改良をし少量ではあるが実るようになつた。この村ではパンの代わりは荒イモを主食にする。村で育つ荒イモも師匠の改良の結果収穫量が増えた。生まれ育つた故郷の味を噛み締めるのも最後になるかもしれないとい、じつくり味わつた。焼き荒イモにムグ山羊バター

添えは美味だが、正直黒パンは不味いと思いながら。

村の中央の噴水広場で腰掛けで飯を食べていると、ふくよかな体を揺らして、白いエプロンに白い三角巾のチャミおばさんが、ランプを数個抱え持つて小走りでやって来た。

「チャミおばさん、こんにちは。今昼間ですよ？ ランプ持つて何しているんですか？」

「カケルちゃんに修理をしてもらいたかったの。村を出るつて聞いたから。忙しいかしら……？」

全部師匠が紋章を刻んだランプだった。このランプ全て獣油が要らない。刻んだ紋章が磨耗しない限り魔法の灯りを灯し続ける。村にあるランプの多くが刻紋灯ランプだ。ランプに手を伸ばし、誇らしい心地になつた。「あのゴリゴリ魔術士」へのムカムカも晴れた。

「身支度は全部終わりましたんで承ります。彫り直すだけですから今日中に終わります。明日出発前にドアの横に置いておきますよ」一力と笑いランプを預かる。

マルス・リングソーは「紋章魔術の権威」と称されていた。その唯一の直弟子で養女がカケルだつた。

紋章魔術は紋章を用いて魔術を発動させる。紋章魔術には刻紋魔術と描紋魔術がある。

刻紋魔術は物品に刻んだ紋章を、魔力を込めるこ^トとによって効果が得られて、何度も使えるのが特徴。

一方の描紋魔術は魔力が籠つた特殊染料で紋章を描く魔術で、刻紋魔術に比べ使い捨てだが、魔力の無い者でも効果が得られる。

マルスは紋章魔術で不便な寒村の暮らしを、少しでも楽で豊かにしようとした。希望を込めて「生活魔術」と呼んだ。亡き師匠の意志を継ぐに足りないのは更なる魔術の知識、経験。王都にたどり着けば叶う。努力と執念は誰にも負けないつもりだ。

「本当に有り難うねえ……」

チャミおばさんは田尻に涙を浮かべ、カケルをそつと抱きしめた。静かに座っていたモエギの頭も撫でて手を振り帰つていつた。

チャミおばさんを見送つたカケルは肩に肉の入つた小袋の紐をかけ、ランプの持ち手を腕に通して案山子のよつに複数のランプのガラスが擦れないようにして家へ戻ろうとした。

「うああああああっ……」

石つぶてが数個ランプ田掛けて飛んできた。モエギがサつとカケルの前に壁になつてくれたので割れずに済んだ。低い体制で唸り声を向けた先に、ムカムカの原因が居た。

「何すんじゃワレえ……」

銀糸の縁取りの刺繡を施した長身の魔術士の黒いローブ。師匠と弟子共通で最悪の間柄。師匠が亡くなつたその日に予め用意した手管で家を差し押されたのは、師匠の残した遺産の品々を奪うためだ。血色の悪い田元と口端しをゆがめながら、村長の甥のゲルバーハ・フライシヤは、土属性の石つぶて呪言魔術を放つてご満悦の様子だつた。

「こんな初級魔術も防げないクソ弟子様、ご機嫌いががでございまあすかあ～？」

ケタケタとそれは愉快と嬌声を上げた。

「預かりモノのランプが壊れるだろうがあああ～！」

抗議の言葉を無視し、また呪言魔術を発動させよつとする様子にカケルは堪忍袋の尾が切れた。ポケットに入れておいたコイツ専用のとつておきの餌別を取り出した。最後の田ぐらい差し上げて構わないだろつと、出会つたとき使つてやろうと精製しておいた特性粉薬だつた。

「モエギ！」

モエギがゲルバー・ハに飛び掛る。紡ぐ言葉と体制を崩す。その瞬間を狙つて、握った小袋の口を縛つていた紐を解き口をゲルバー・ハに向けて、袋に魔力を込めた。小袋の外側のに染料で描かれていた紋様が輝いた。これぞ、紋章魔術の一つ描紋魔術の力が発動された証。直後、小袋からブフーっと、なんか茶色い粉がゲルバー・ハの顔に吹き付けられた。カケルは会心の笑みを浮かべた。

第1話・生活魔術士見習い、決意する（後書き）

誤字脱字が無いほうが珍しいくらいですので、誤字脱字指摘はもちろん、アドバイス、感想も待っています。

不確定な人に読んでもらうことも初なのでドキドキしている小心者ですが、ヨロシクお願いします！

あと1人でもいいからこの物語を読んで「楽しかった」と思ってくださることを願つて……。

第2話・生活魔術士見習い、旅立つ（前書き）

バクバクと2話更新です。

第2話・生活魔術士見習い、旅立つ

日が暮れ夜の冷氣に包まれる。寒暖の差が身に堪えられない。力ケルは作業の手を止めて、暖炉に手をかざした。

暖炉の中には薪が無い。代わりに刻紋済みの円形銅製の板が置かれている。フツと着合いを込めて魔力を送ると紋章が赤く輝いて熱を発した。床に伏せていたモエギが暖炉の側にやつてきてクウと心地良さそうに鳴いた。

冬になればミカーノ村は深い雪に閉ざされ外界への行き来はできない。師匠の刻紋灯ランプがあれば長時間灯りが持つ。夜に作業をしやすい。村の人々も刻紋灯ランプの灯りの元、冬のための準備をしていることだろう。収穫した荒イモ、黒麦、山羊ムグ、狩猟の獲物の加工。獸油の灯りを使っていた頃と比べ作業効率も上がったと、収穫物や加工品をお礼にくれたりもしたものだ。

修理の終わった刻紋灯ランプをテーブルに並べた、お茶を沸かすためヤカンに水を入れようとしたときドンドンと扉を叩く音がした。モエギがパツと飛び起き扉に向かった。

「こんばんはダヨ！」

声の主がすぐ分かつたので、カケルは扉を開けた。夜だというのにランプも持っていない。変わりにパンパンになつた袋を持っている。背はカケルより頭一つ分低い。褐色の肌にタコのできたゴツゴツした手、お下げ髪でぱつちりした大きな黒目をキラキラさせて訪ねてきたのは友達のルストウルソンだつた。ルストウルソンはもつと山近くに住んでいるドワーフ族で、この種族は武器防具や物の加工が得意で力が強い。夜目が利くのでランプは必要ない。

「いよいよ明日ダヨネ、お土産もつてきたんダヨ」

家の中に招きいれて椅子を進めてお茶を用意していると、ルストウルソンがお下げをフリフリ袋の中身をテープルに出していた。大小様々な石の欠片でそれぞれ色合も違つ。カケルが飛びついた。

「おおおお！ これは薬に使える。これは輝石の原石……でも大きいなあ、リュックに入らないよ。」つちは碎いて詰め込もう。貴重な魔力染料の材料だからねー」

ルストウルソンはカケルが石に夢中になつたので、代わりにお茶を入れた。師匠ともども交流があつて何度も訪ねていてるので勝手は分かっている。申し訳ないと頭をチョコんと下げるモエギに手を振つて、居間を見渡したときに気になつたことを口にした。

「カケル。アンタあ、このバカでかいリュックもどき、旅には向かんと思うんだヨ……」

カケルが背負うと、頭から腰下までの縦長で、厚みは30コム（カケルの肩幅より狭いくらい）もある。リュックの素材は布でも皮でもなく、金属っぽかつたが、ルストウルソンには分からぬ素材だつた。合成した金属だろう。見た目は背負える宝箱のように思えた。角は丸く加工されている。背負い紐は丈夫そうな皮だ。徒步だと聞いていたので呆れた。このリュックモドキを背負つて歩くことはできたとしても、危険がせまつて逃げる時は致命的だ。

「何を言つ。このリュックはすごいんだよ！―― 師匠の遺品の一つで、師匠が旅をしてた時にも使ってたんだつて。沢山生活魔術が刻紋されてる世界に一つしかない、紋章魔術士にはヨダレもの装備だし――！」

ポンとリュックをはたいて、持つてみ？ と促されたので、ルストウルソンは背負つてみた。ビックリして固まり、呟いた。

「すごく軽い…… んダヨ……！」

カケルの説明によると、このリュックは複数の刻紋魔術が施されていて、中に入れる紋章魔術加工に必要な品々を保護する術、きつ

ちり詰め込んでも重さを軽量化術で減らし、さらに、盗難防止術もかかっている。興味が沸いて詳しく聞きたかったが、カケルは生活魔術の説明に饒舌になつて、明日の出発ができなくなりそつだと判断してやめた。

「だけども。チコツと……寂しくなるんダアヨ」

詰め込めない石はルストウルソンに返して、一緒にお茶を飲んだ。長い付き合いだから別れは辛かつた。一度と会えない訳ではないだろうが、再開がいつになるかは分からなかつた。それは王都までの旅が困難なことが確実だつたからだ。村の外では害獣や追いはぎに会うかもしれない。次の村までの道は整備はされてない道が多く、デコボコしたりホコリつぽかつたり、草や風や雨の侵食で埋もれているかもしれない。自然災害で歩けない土地もあるだろう。他の村や町でトラブルに巻き込まれるかもしれない。旅をする人は、戦える剣士と共に集団になつて助け合いながら進むのが常識で、15歳の少女が1人で旅をすることは、自殺行為に等しかつた。今さらその事をカケルに言つても、どうしようも無いのも事実だつた。

「アタシは……もうなんも言わないんダヨ。モエギがいるしきつと、大丈夫なんダヨね……」

鼻声になつたルストウルソンをカケルは黙つて抱きしめた。ポンポンと背を叩いて放すとニカツと笑つた。

「心配ご無用！ 攻撃魔術は習得してないし使えないのは事実。でもモエギは頼りになりまくるし、師匠には遠く及ばないけど、紋章魔術が使えるから創意工夫次第で何とかする！ 生活魔術士……見習いをなめんなつて感じだよ！ お土産は、岩盤堀りできる生活魔術をプレゼントってどお？」

何とかする、そう言つて何時も笑うのだ。そんな友人がルストウルソンは好きだつた。

「それは良いネ。穴堀りができる道具は作つてもらつたけど、岩

も掘れるようになつたら、採掘が樂になるヨネ。楽しみダヨー。」

ルストウルソンは荒イモ作り名人でもある。お下げを揺らして笑つた大切な友人ルストウルソンに、石と一緒に持つてきた荒イモを押し付けられつつ、きっとまた会いに行きたい。カケルは強く思つた。

翌日早朝。夜陰が残る肌寒いが晴れ渡つた空。白い息を吐き出しながら、荷物を背負い、預かつたランプを持ってカケルはまだ薄暗い山道を下つた。

チャミおばさんの家の扉の横に預かつた刻紋灯ランプを全部置く。他の家からも頼まれた物が混じつているだろうが、チャミおばさんが渡してくれるだろう。

「明日でも昨日でもなくつてー。今日が相応しかつたんだ、この空があかしーだーかーらー」

鼻歌である。モエギもクウクーと鼻歌のよつな声で合わせている。家にあつた蔵書に、吟遊詩人の詩を編集した旅人の本があつて夢中で読んだ。その影響か独り言や鼻歌がたまに無意識に出てくる。

スキップ気味に村の出入口の柵扉の前まで来ると数人村人がいた。見送りに来てくれたらしい。鼻歌を聴かれたとちよつと恥かしくなつたが、流して挨拶する。チャミおばさんも居た。

「旅立つには良い天氣だね」

村人たちの中から村長が挨拶した。村長は青年で目元がゲルバーハに似ているが性格は真逆。村長だつた祖父から代替わりをしたばかりだ。村長が何か聞きたそうな視線を投げてくるので、ゲルバーハを思い出しながら言つた。

「大丈夫ですよ。数日痒いだけ治りますから。ただ集中力散漫で呪

こん

言魔術なんてとても使えませんけれどね。原料は山荒イモの痒み成分。その濃厚なヤツです」

ああ。と村長は納得したように頷いた。カケルは思い出し笑いを飲み込んだ。魔術学校から帰ってきたゲルバー・ハとは親戚で一緒に住んでいる。痒い痒いと叫びながら身を捩じらせ、体中を搔いていて確かに気が散つていそつた。不機嫌になると魔術ですぐ物を壊したり、村人にも術をかけようとるので、理由も分かつたし放置しようと思った。

「ゲルバー・ハが家を取り上げたこと、何もできなくてすみません。旅を無事を祈っています」

「見送り有り難うござります。お祖父さん、体調良くなるといいですね。薬、ちゃんと飲ませてくださいね」

前村長には世話になつた。紋章魔術を扱うために、魔力染料の素材である鉱物や植物の知識は欠かせない。師匠は薬を煎じることにも長けていた。カケルも煎じることが出来る。師匠が作つた薬はストックが無くなつた後のために、レシピを村長に預けてある。大丈夫だろう。

村長と握手を交わすと、チャミおばさんが抱きしめてきた。何度も別れの挨拶を重ね、村の人たちに見送られ村を後にした。

第2話・生活魔術士見習い、旅立つ（後書き）

30コム＝30センチ

読んでくださつて有り難うござります

1話投稿後に感想を早速頂いて励みになりました。続き頑張ります！
投稿後にチェックしたら山のよつに誤字脱字削除部分を発見して冷
や汗も……。

誤字脱字アドバイス感想、待っています

第3話・生活魔術士見習い、廃村に立ち寄る（前書き）

ウナウナとやつとろ話じょです。

第3話・生活魔術士見習い、廃村に立ち寄る

ミカーノ村周辺は、山と森と渓谷に囲まれている。山間の森の中を徒步で2・3日ほどで森を抜けたはずだ。

木々の枝葉から色づいた枯葉がひらひら舞い落ちた。まだ青葉が残る時期なので、木の実が拾えないのが残念だつた。堆肥した葉の道に落ちる木漏れ日が綺麗だつた。道程で見つけた薬効のある植物に足を止めがちなカケルは、モエギに急き立てられてながら1日中歩いた。夜になる前に野宿できそうな場所を探して確保した。

「まだ森だから薪は確保できるし、1日目の夜の雰囲気を味わいたいからに焚き火をしよう」

歩きながら拾つておいた小枝と、周囲の小枝と枯葉を集め、小枝と枯れ草を組んで焚き火の準備をする。

ポケットが沢山付いたコートを探つて10コム程の金属の棒を出して、どつちが先端だつたつけ？と、咳きながら組んだ小枝の間の枯れ草に向けた。

ボツと金属の棒の先端から種火が出て火をつけた。火打石の代わりの、種火を着けるだけの刻紋火種捧だ。

カケルはパチンと指を鳴らして、自分が作つた生活魔術の品を、初めての旅で役に立つことが出来た喜びを噛み締めた。モエギは寝そべりながらチラつとカケルを見て目を閉じた。

カケルの住んでいたミカーノ村は、村の畠を荒らすモグ（森で育つ猪のような動物。気性が荒い）や家畜を狙つてやつて来る森狼の被害を防ぐために頑丈な柵で村を囲む。森を安全に進むためには害獸から身を守らなければいけない。

安全な寝床を確保するために、リュックから数本の細い鉤付き楔かぎくさび

と、赤い魔力染料で染めた糸を巻きつけたボビンを取り出した。焚き火を中心に、眠るスペースを含んだ大また歩き3歩分を半径にして地面に楔を打ちつけ、楔の鉤部分に糸をクルッと引っ掛け固定しながら円で囲つた。

「これは警報術を施した糸でラインを作る道具ね。糸に生き物が振ると、音と光が出るんだよ。地面に線が引けない場所に丁度良いね！」

モエギが起きて興味深そうに見るので嬉々と説明してあげた。ただ効果を語りたかつただけとも言ひ。

ルストウルソンにもらつた荒イモで焼き芋を作つて、村で貰つた肉の残りを焼いて食べた。モエギには生肉のままで、荒イモは焼いたあと冷まして食べさせた。モエギは自分で食べ物を取つて来れるが、初日夜のサービスだ。

森を抜けねば知らない土地。危機感より好奇心が勝ち、ドキドキとまだ見ぬ土地に思いをはせる。

リュックから古びた冊子を取り出す。魔術学園の教科書だ。「アリシュー・レ魔術学園入門書」と表紙にある。師匠の遺品整理をした時見つけた。裏に師匠の名前のサイン、中に魔術学校の所在地、内容は学園のこと。魔術の初步的な説明が乗つていて。師匠が書き込んだメモがあちこちにあり、熱心に勉強していた様子が分かる。

中でも紋章魔術のページの書きこみが多い。

「紋章魔術」のタイトル文字にグリグリと丸をした「重要！」の印を見つめて微笑んだ。師匠は魔術学校に入学してこの教科書を開いた時から紋章魔術に魅せられていたのかも知れない。

同じ学校で私も学ぶんだ。

そのために長く危険な旅を乗り越えて、たどりついてみせる。

「モエギ、交代で寝て見張りをしよう」

モエギに声をかけた時、微かに遠吼えが聞こえた。森狼の鳴き声だ。もしかしたら狩りの標的にされるかもしれない。冊子をしまい、太い枝で簡易松明を作った。気が張つて寝付けそうにもないので、夜更けまで寝ずの番をすることにした。

朝になつた。昨晩は森狼の気配が近くまで来たが襲つてはこなかつた。焚き火とモエギのおかげのようだ。モエギをモフモフと抱きしめて感謝をし、荒イモを食べた。量があるので、しばらくは荒イモの食事が続く。次の村に着いたらパンを食べよう。

歩き続け3日。森を抜けたら、膝丈までの草しかない土地に出た。草原だつた。ポツポツ申し訳程度にしか樹木は生えていない。地平線を見渡せる場所は初めて目にした。山と森の起伏の激しい土地しか見たことが無いカケルは暫く呆けたように眺めていた。

吹き抜ける風が草原を波立たせた。

サヤサヤと鳴る音が耳に残る。

道らしき跡に沿つて、視界一杯の草原と空を眺めながら歩くのは気持ち良かつた。

日が暮れる時、朝になる時、空は幾重の色を溶かす。木の陰が対比して栄える。

広い視界に、心が膨らむ。

何所にでも行ける。

モエギは草原を走つて先行しては戻るを繰り返した。危険な事が無いか確認しているのだろうが、思いきり走り回るのが楽しそうでもあつた。

「何か……、すごいね。描きとめたくなるけど我慢しよう」

荷物に入れた染料を固形にして収めたパレットと、スケッチブックを思い出したが、先は長い。次の村に辿り着くことを第一に歩き続けた。

歩き続けてさらに2日。草原が荒地になった。

乾いた土地はひび割れて、干からびた短い草がボソボソ生えている。木は枯葉を少し残しているだけだった。

むき出しになつて、「ロロロロと石がある歩きにくい道の先に複数の家を見つけた。

「村かな？」

モエギが先行して様子を見に行つたので、歩を止めて待つた。暫く待つとモエギが戻つてきて、行こうと促すので安全なのだろうと判断してその村を目指した。

そろそろ屋根のある場所でゆっくり眠りたいし、保存食以外の食べ物を食べたい。お風呂も入りたい。期待して辿り着いた村は……

……。

人が居ない廃村だつた

。

屋根に穴が、漆喰の壁はひび割れが、戸は外れかかつたり無かつたり。

村の周囲は荒れた畠の跡が見受けられた。防壁代わりの木柵は見る影もない。井戸を覗くと、つるべの残骸が入り込んだ枯葉と一緒に濁った水の中でプカプカ浮かんでいた。

ムウと唸つて、一番状態の良い家を覗き込んだ。泊るなら雨風をしのげる屋根と壁があつたほうがいい。戸を開けて踏み込むとホコリと煤と藁屑が舞つた。居間と寝室だけの簡素な家。農民の家らしい。

「まずは掃除からかなあ。このままじゃ寝られやしないよ……。ア、モエギは入っちゃダメ！ 灰まみれ姫になるからねつ！ 私は魔術士……見習いだけど、まだ変身させてあげれないし、城と王子も無理無理い……。つと、これが使えるかな」

モエギに待てと指示して、リュックを漁つて紋章が刺繡してある雑巾を取り出した。高い場所から乾拭きをする。紋章が光り、擦つた跡はホコリと煤がサッパリと拭き取られた。吸着術を施した雑巾で居間中を吹き掃除して、土むきだしの床をなんとか整えた。

これで眠れるだろう。腰をたたきながら満足気に見渡して、真っ黒になつた雑巾の片面を眺めて、紋章が刺繡されていいる綺麗な面を外側に、茶巾包みして口を紐でグルグル縛り、リュックに入れた。

「警戒線どうしようかなあ。誰も居ないはずだけれど、何が起こるか判らないし。家を取り囲むほどには、糸の長さが足りないし。壁があるから、通り口に粉を引いておくか」

何かあればモエギも起きるだろう。リュックから赤い粉の小瓶を出して戸の外に粉で線を引いた。森で使つた赤い糸と同じ効果の粉

で、1回反応すると効果が消滅する。

掃除に時間をかけたために、陽が落ちた。リュックにぶら下げていた刻紋灯ランプを灯す。

煮炊きできる竈かまどがあるようだ。カケルは腰のベルトに付けていたウエストポーチを開けた。

手のひらサイズの円形の金属板カーボードが何枚も入っている。それぞれ違った紋章が刻紋されている。術がこもった携帯できる生活魔術で、すぐに取り出せるようにしている。故郷の家の暖炉で煮炊きに使つた調理加熱術のカードを1枚抜き出して、竈に置き発動させ携帯小鍋でお茶を沸かした。小鍋は湯や調理の他、染料、薬草を煎じるのにも使う必需品だ。

「パンが食べたかったなあ……。次の村まではお預けじゃねえ」

銅のカップで食後の薬茶を飲みつつ疲れを癒す。ため息が出た。何所からか捕つてきたらしのネズミのような小動物を噛むモエギからそつと目をそらしつつ、窓の外を見つめる。

村の外に出て誰にも会つていない。この廃村は人為的に壊されたいた様子があり、それが原因で人が居なくなつたのだろうか。

モエギがいるから独りではないが、思つた事を聞いてくれ、頷いてくれる人が居たら……。

無知であるから、旅に出よう。
知り過ぎたから、旅に出よう。
変われないから、旅に出よう。
変わりたいから、旅に出よう。

私の運命やまとを、手引ひとく他人に出会いたいから。
進み続けよう。

ピイイイイイイイイイイイイイイー！

戸の隙間から激しい光が漏れ、甲高い音が鳴り響く。外側の戸口
地面に描いた警報術に引っかかった存在がいる。

モエギが身を低く構え警戒態勢を取り、カケルは顔を赤くした。

第3話・生活魔術士見習い、廃村に立ち寄る（後書き）

誤字脱字指摘アドバイス、お待ちしております

第4話・生活魔術士見習い、ファーストコンタクトする（前書き）

アタフタと4話更新。主人公の容姿がここでやっと分かれます

第4話・生活魔術士見習い、ファーストコンタクトする

「うひょああああああ！」

「うわああああああ！」

戸を勢いよく開け放つ。同時にモエギが戸の外に向かって飛びかかつた。

カケルは棒きれをひつつかみ、刻紋灯ランプを掲げ、モエギに押さえつけられた人物に近づいた。弓と矢筒を背負った弓使いらしき汚れたフード付きの外套を羽織った青年だった。

青年はかすれた呻き声を零す。

モエギは押さえつけただけで攻撃をしていない。眉を顰めて観察する。外套の肩部分に滲んだ血。顔には疲労の色が濃い。痛みこらえていいるようだった。

激しく動搖してしまったが、この人物がどういった目的で近づいて来たか確かめなければいけない事を思い出した。

「アンタ、誰？」

しゃがみこんで訪ねると、青年は静かにカケルを見つめた。

「ノエ村の……、セキだ。助けを求めるにミカーゴ村へ……」

カケルは目を丸くした。近くに村があるのだろうか。故郷に助けを求める。どんな事情だろう。興味が沸いた。青年の装備を見るに、ミカーゴ村まで距離があるのにずいぶん荷物が少ない。旅人でもないようだ。

抵抗するそぶりが無いということは敵意は無いのかもしれない。

肩の傷は深そうで、青年の言葉を信じるならば、この状態でここまで来たのはよほどの急を要するのだろう。

「念のために、武器は預からせてもらうかんね」

「こそ」と青年の弓と矢と、腰につけた短剣を没収する。青年は大人しかつた。

「モエギ退いてあげて。治療をするから。もし危害を加えようとしたら、ウチの護衛モエギがすぐ動くかんね？」

モエギがカケルの側に戻った。警戒を解かずにジッと青年を見つめ続ける。青年は頷き、ふらつきながら肩を押さえ立ち上がった。力が入らなく座り込んだので肩を貸して家中へ連れて行つた。

「この傷は矢傷か……ちょっと深いね。顔色良くないのはろくに食べて休んでないからなの？ そんな状態でミカーノ村までは無理だよ」

リュックから外傷用の薬と包帯を出して処置をした。傷から血がジクジクにじむのでウエストポーチから金属板カードを抜き出して傷部分に当てる魔力を送つた。板が淡く発光した。

青年は驚き身をよじらせたが、魔力を送り続けていると表情を緩めた。まじまじとカケルを見つめる。カケルはニンマリ笑つて、時間を開けて治癒力活性術を刻紋いくもんしたカードで出血する傷口をふさいだ。

出血が止まり、痛みが和らいだ青年に滋養のある薬茶を飲ませた。自分の羽織つていたマントを被せて休ませると青年はすぐ眠つた。

事情を聞くのは明日にしよう。今日は良く働いたと自分を労つた。緊張を重ね、魔力を送り続け疲労感と眠気を噛み殺しながら警戒線を描き直して、モエギに見張りをさせてカケルも眠つた。

「助かりました。有り難うござります」

翌朝。深く頭を下げて礼を言つ青年セキは、改めてカケルを見つめた。

日除けのフェルト帽子、ポケットが沢山ついたゆつたりとした丈夫で上質なコート、腰ベルトにはウエストポーチと短剣をぶら下げている。長ズボンに履きおろしたばかりであまりくたびれていない皮長靴。荷物を入れたリュックは大きすぎ素材が謎だが、旅人のは間違いないだろう。むつりと青年を見返す大きな瞳は柔らかい青。ふぞろいの黒い短髪は艶やかだ。

歳は13歳前後に見え小柄。一見頼りなさそうだが、昨晩魔術らしき術で治療してくれたり、今も火を使わずに湯を沸かしてみせた事から魔術士と判断する。側にいる珍しい色をした大きな狼犬は強そうで、良く馴なれてている。魔術士なら力を借りることができれば。セキは希望が沸いてきた。

「何……？ ジロジロ見られるほど変？」

自分の服を見なおして、カケルは落ち着かなくなってきた。今更気づいたがやつと出会つた、初めての外の人だつた。

外の人からジロジロ見られるほど突飛な格好だらうか？ どう思われているんだろう？

「あの……さあ、ここに来た理由とか話してくれる？」

氣まずさを感じたので、話を切り替える。

「そうでした。私はここから南東にあるノエ村に住む、セキと言つ者です。現在ノエ村は……、賊に占領されています」

うわあつと、カケルは息を呑んだ。セキは険しい表情で話を続ける。

「私は村長に頼まれマルスという魔術士が隠居しているといつミカゴ村へ助けを求め村を脱出しました。矢傷は賊の見張りに見つかった時射られました。なんとかこの廃村までやつて来たら、人が居ないはずの家から灯りが。それで……」

そこまで聞いてカケルは手をかざして話を止めた。真顔でゴクリ

と唾を飲み込んで青年ににじり寄つた。

「そんな手負いで、駄かもしけないのに危険を犯して近づいた理由
つて。もしかして……」

「は
？
ああ、
変わりな

「立ちの気持ちが分かる良い詩でした……ね？ ホッとしまして助けを求めてみよう」

「やっぱり聞こえたんだ、聞いたんだああああああ――――――!」

誰も居ないと思っていたので、つい口に出して詠んでしまった詩をまさか聞かるとは。羞恥で顔を赤くして暫く「口」のたうち回った。

モエギが落ち着けと顔を舐めたので、落ち着きを取り戻した。

焼き芋の残りと干し肉、薬茶を渡して朝御飯にする。よほどお腹が空いていたらしく、夢中でほおばるセキに自分の芋も渡した。

「で、残念なお知らせがあります。マルスは師匠ですが……亡くな
りました。この廃村からでは距離がありすぎ時間がかかります。森
は害獣が居ますし完治していない身では行くのはお勧めしません。
ミカーゴ村の人々は自衛するだけで手一杯です。助けは望めません
青年はやはりとため息を付いた。そしてカケルを真剣な表情で見
つめた。カケルは「ウウ」と後ずさりした。

「魔術士様お願いします。村を救う手助けを！ すが、貴方が居てくれれば……！」

村にいる人々を思い不安を押し殺して、セギの言葉はかされた。

グッと奥歯を噛み締めた。

村に賊が居るという。賊と戦うというパターンはできれば避けたい。けれど見捨てておけない。

紋章魔術は準備に時間がかかる。必要だと思う術を込めた刻紋・描紋道具を用意したり、無ければ必要な魔術効果を得るために紋章を描く時間が必要だ。呪言魔術のように、呪文を唱えれば即座に術を使える訳でもない。戦いに不向きだ。

カケルは紋章魔術専門で生活魔術が得意分野。さらに、炎の玉を打ち出したり、風の刃を出して攻撃したりする攻撃魔術は使えない。そういった戦力を求められているとしたら、期待してくれているらしいセキに申し訳なかつた。

カケルはウエストポーチに手を触れた。

セキを生活魔術で助けることはできた。戦力にならない私に何ができる？

出来ないことは出来ない。無いものねだりをして仕方が無い。出来る範囲で何とかする。精一杯。結果は後で付いてくるものだ。この出会いは外の世界で初めての縁だ。断ち捨てたくない。セキは悪い人に見えない。今を一生懸命生きる人にこそ、生活魔術は必要であるはずだ。ならば。

「出来ることは少ないかもだけど。ノエ村に居る賊の事、もっと詳しく教えてもらえる？」

カケルは決意した。

第4話・生活魔術士見習い、ファーストコンタクトする（後書き）

誤字脱字フオーエバー……おー

投稿後の修正が激しいです。某所では「誤字脱字パッシュ」と言わ
れるくらいです。修正更新多くてそのせいでシステムダウンさせた
らどうしよう！

誤字脱字・指摘・アドバイス・感想お待ちしています

第5話・生活魔術士見習い、森に入る（前書き）

お待たせしましたー……モニユモニユ。

第5話・生活魔術士見習い、森に入る

「「めん、私は攻撃魔術使えないから戦力にならないんだ……。でも、ドノバーグの町まで送ることはできるし」

セキは落胆した。やはり攻撃魔術を当てにされていたらしい。

魔術士といえば、火、水、風、土の4属性攻撃魔術を使い、派手に戦うイメージがあるのでだろう。ミカーゴ村からは出たことはないカケルだが、蔵書の冒険物語でよく詠われるのは属性魔術で戦う呪言魔術士が多いことからも一般的のイメージが推測できる。

申し訳ないと繰り返すカケルに、セキはあからさまな落胆の態度を取つてしまつたことに気づいて慌てて謝つた。

「魔術士様に出会えたからこそ、まともに歩けるまで回復する事ができましたし、無駄足をせずに済みました。一番近いドノバークの町へ伝達の鳥で救援の連絡をしたはずですが、届かなかつた事は仕方ありません。今度は直に助けを求めるべきつと、衛士を派遣してくれるはずです。町まで宜しくお願いします……！」

早速出発しようとするセキにカケルは小鍋を片手にウエストポーチから金属板を出しつつ待つたと声をかける。

「今更だけど自己紹介。私はマルス・リングソーの弟子の魔術師見習いのカケル・リングソー。カケルって呼んで。こつちはモエギ。習得魔術は紋章魔術専門。生活魔術ならまかして……！」

「生活……魔術？」

立ち止まつて振り返るセキを横目に、カケルは小鍋の上にカード

をかざして発動させた。カードの下に薄らと霧が出現する。ゆつくりと霧が集まり雲がポタンと落ちた。「空気が乾燥してるから少ないな……」とカケルがぼやきながら魔力をカードに送り続けると霧の塊から小雨が小鍋に振った。

「これが生活魔術。日常生活を楽に豊かにする魔術の総称ね。今使つてるのはカードに刻紋した脱水術。水袋の水を補給するために空中の湿気を集めて抽出してる。あまり集められないみたいだけど、今はしょうがないか」

水をじょうじで水袋に注ぎ、道具を仕舞う。部屋の隅に立てかけた弓と矢筒をセキに渡す。

「食料も自分の分しかないし。弓が使えるなら獲物を獲つてね」「ではノホの森に入りましょう。狩猟で歩きなれていますし、賊から身を隠しながら近づいて、村の様子を確認できます」

「森かあ。地元の民とモエギ居るし。了解ー」

一行は廃村を後にした。

セキは矢筒を背負い弓を手に先頭を。

カケルの横にモエギが尻尾を揺らし並ぶ。

廃村を振り返った。

空は風に流されてきた千切れ雲で溢れた。陽が届かない雲陰に、廃村と荒地が溶けて見えなくなつていた。

道を外れて進む。同じ荒地でも随分様変わりするものだ。

背の低い野草が紫、黄、と一緒に咲き誇つて涼しい風に揺れてい
る。

その先に、森の影が海原に浮かぶ島のように現れた。ノエの森だ。

森としては小規模ながらも、村に恩恵をもたらしてくれる。狩猟の獲物、木の実、野草、木材。村で見込みのある者はノエの森に入る猟人となる。森で歩く術、獲物を狩る弓の腕、森の主を避ける知識を叩き込まれる。セキは故郷の森の事を弾むように話す。戻ってきたことで、少し安堵したようでもあった。

「森の主？！」

ノエの森の前で、カケルはギョッとした。思い切り不吉な用語だと思った。

「はい。ノエの森の動物の頂点に立つ魔物で、ジャイアント・レッドスパイダー、通称赤主あかぬしと呼ばれています。巣は森を移動しますが、近づいて巣糸に触れない限り大人しいですよ」

「セキは猟人だし、赤主を避ける方法とかもちろん……？」

「心得てるつもりです。しかし巣に掛かる猟人も全く居ない訳ではなく……数年前にも……」

「なんでそげな事、言うのーーー！」

カケルは大声でセキの声を遮つて睨んだ。これからその森に入るというのに気力を削がれるのはごめんだ。セキはため息をついた。

「脅してるように聞こえるかもしぬせんが、心して欲しかったんです。森に入つたら、珍しい草が生えていてもどうか足を止めて私から離れないように。赤主の巣は地面に掘られた穴の上に作られますが、見つけにくい巣もありますから」

カケルに噛んで含めるように諭す。カケルは苦い表情で目を反らした。荒地を歩いている間にも、立ち止まり、ウロウロし薬効の有る草を摘んでいたのだ。

「喰われたくないし。分かつたよ……」

森の植物に興味津々だったようだった。

ふてくされながらリュックを漁り、金属製の柄と頭部を組み立て

始めた。

「ハンマー？ 細くて脆もろそで武器にはなりそうにも……」
怪訝けげんな顔で作業を見つめるセキに、念のためだよと答えながら伸縮式柄を伸ばして振った。パー^ツがしつかり固定されていることを確かめる。頭部の打ちつけ面に、ウエストポーチの金属板を四方についた留め金でパチンとほめた。

「んじゃ行きますか。のんびりしてらんないし」

視界の通る村の周囲の草原を歩けば、見張りの賊に見つかってしまう。ノ^ンの森の中を進み、村の牧場近くまで行き様子を伺う。森は格好の隠れ蓑になるはずだ。

カケルたちは森へ踏み込んだ。

森の中は薄暗かつた。

曇天の森の中は背の高い木々の葉が雲灯りを遮さえぎつて、足元が見えにくく、進む方向を見失いそうだ。

カケルはフカフカした枯葉と小枝を踏みしめ、木々の根と慎重に越え、羊齒シダをかき分け遅れがちに進む。

モエギが身軽に何度も戻つてきては、カケルの様子を伺う。セキは常に周囲に警戒しながら先導する。赤主を避けつつ、夜になる前に森で安全に野営できる場所まで進まなければいけない。早足気味になつたセキに、カケルは何も言わず付いて行つた。

「とりあえず、此處で野宿しましょうか」

巨木の側、比較的羊齒が生えていない開けた場所に着いた。

カケルはドス^ツと腰を下ろしフーと長い息を吐いた。健脚だと思っていたが、プロの足には到底敵わない。水を得た魚だなあと、セ

キを見て思った。

「といえば、森には水場ないの？」

「無くとも飲料水には困らないが、火照った脚を冷やしたい。顔も洗いたい。」

セキは指示しながら、

「泉が少し先にありますが、足場が悪いので独りで行かないでくださいね？ 私は獲物を狩ってきます。ここで野営の準備をして待っていてください」

念を押し、身軽に木々の間へ消えていった。

この時期の森には、冬に備えて猪モグ（森で育つ猪のような動物。気性が荒く、たまに畠に被害が出たりする。森地域の村で狩猟対象になる動物。食肉になる）が活発になるらしい。久しぶりにまともな量の生肉を調理できそうだと期待が高まる。モエギに付いていってもらえば、確実に成果が上がるだろう。モエギに付いて行くよう促す。

「クウ？」

「うん。半分は心配してくれるのは分かつてるよー。だあいじょーぶ、野営の準備しながら待ってるし」

興味の有る事に、まっしぐらになるカケルを何度も連れ戻した経験のあるモエギは、行つておいでと手を振り野営の準備をするカケルを未練気味に眺め、セキを追つて駆けて行つた。モエギも久しぶりに大きな獲物の生肉を食べたかつたのかもしれない。

羊歯の葉を刈つて山盛りにし、槌を打ち付けた。装着した脱水術のコードが輝きジュワッと一気に乾燥した。火種拂で薪代わりの羊歯に火を点け、テキパキと警報術の糸を回りに。セキとモエギが帰るのを待ちながら一晩分の焚き火の燃料を作つた。

「むう。暇だ」

準備がすっかり終わって、聞こえた夜の虫と鳥の声の回数を数えて待つのもすっかり飽きてしまった。そうなると、暇をつぶすために一番やりたいことは一つしかなかつた。

「あー、確かに近くなんだよね泉。様子見ならいよね？」

泉がある方へ歩く。半分心配気のモエギ、独りで行かないでと念を押したセキの記憶は退屈にすっかり上書きされたようだつた。

「水辺に珍しい薬草あるかもしないしねー」

あまりこつていらない様子でランプと槌を持って立ち上がつた。

水の音を田指し、ランプの灯りを頼りに歩くとチャップチャップと音がした。

足場が悪いと聞いていたので、ソロソロ近づくと水の匂いがし、視界が開ける。

そこは湧き水で潤つた狭いが深そうな泉だつた。溢れた水が小さな沢を作つて地面を削つて伸びていた。

カケルは沢のほうへゆっくり慎重に回り込んだ。

「やつと洗える！……ん？」

水に手を伸ばしたとき、ザリッと足音を聞いた。顔を上げランプをかざすと夜の闇の中、コラコラと揺れながら人型らしきそれは呻うめいてこくろに手を伸ばした。

「ひつ！」

体が強張りつつ、ソロソロ後ろ歩きで遠ざかひつとした。

熊なら田をそらさずにゆっくりと後退すると良いとは聞いたが、アレは熊じゃなさそうだから見逃してくれるのか分からぬ。

「ぞ……歩く死体……？」
「あ～～～」

「ぎいやあーーー！」

低く間延びした声を聞いてカケルは絶叫し、ランプを投げつけて怒涛の勢いで退却した。

振り返らずに来た道をひた走る。灯りが無いので木に付けた目印も見えない。ザカザカと腐葉土を蹴つて走る音が瞬く間に近づいた。後ろから灯りが射し、振り返る前に肩を捕まれて躊躇^{つまづ}いた。がむしやらに振りかぶった槌はあっさり手で押さえられ恐怖で固まる。

「ガアアアー！」

カケルの後ろからモエギが飛びかかった。悲鳴と足音を追つてすぐ駆けつけてくれたようだ。強靭な前足で押さえられる前に、その人は飛びのいて避けた。

「…………あれ？」

「座り込んだまま呟く。

「モエギ！」

シユツと空を切り矢が飛んで、避けた相手の後の木に突き刺さつた。

「…………やつと会えた、のに」

ボソボソと低い声で話したのは、薄汚れた大男だった。

鎖帷子^{くさりかたびら}鎧^{よろい}の上に無紋の藍チュニック（袖無しの膝下まである緩やかな上着）を着て腰のベルトでしめている。ボサボサの青みがかつた黒髪で眉間に皺^{しわ}を寄せ仏頂面で暗紫の目を細めてカケルを見つめている。

動けないカケルに手を差し出す。モエギが唸ると引っ込めて、逃

げる時に投げつけたランプをカケルの前にそっと置いた。

ガサガサと弓を構えたセキが息を整えながら歩いてきた。

「武器を捨てて、何の目的で近づいたか言え」

「どうか、賊かもしれないんだ。

ぼんやりと見つめていると、大男はあっさりと腰に帯びていた剣を地面に置いた。ずつしりとして華美でない流麗な細工を施した鞘に収まつたままの長剣だった。

「違う。殺すとか、そんな事は……しない」

「信用できませんね。その鎧も欺くためのダミーもしぬませんし」モエギは唸るのを止めた。隙なく大男を見つめている。カケルはモエギの態度の変化を見てフЛАリと立ち上がった。

「なんで追っかけてきたの？」

悲鳴を出しすぎ痛めた喉を押さえつつ尋ねると、大男は頭を下げた。

「迷つて困つていた。一緒に連れて行ってくれないか？ これを預かって……村に」

懐を探る大男の動作に弓の弦をキリリと引き絞るセキに、カケルは待つたと手を上げた。

取り出したのは、羊皮紙で折られた鳥のような物。羽の部分に紋章が描かれている。カケルは男に近づいて羊皮紙を摘まんで凝視した。

「師匠の作った伝達鳥だ」

「それは、村長がドノバーグの町に飛ばした魔法の品です！ なぜ貴方が持つてているんですか？！」

「預かった。要請を受けた自衛団から。引き受けた……から」

どうやら詳しい話を聞く必要がありそうだ、やっと解れた緊張と体に深く息を吐いた。

「……まあ、あれだよ。詳しいことは野営地でね」

態度を軟化させたカケルに大男は屈みこんだ。

「怖がらせて、済まない……」

スッと大きくて硬い手が目じりをすくう。少し眉間の皺が薄くなつている。

覗きこんだ大男を見つめて 。

カケルは叫んで槌を横なぎスイングさせた。

第5話・生活魔術士見習い、森に入る（後書き）

剣士登場です。こつちもお待たせしました（笑）
誤字脱字指摘、感想、アドバイスお待ちしています

第6話・生活魔術十見習い、なごとかかる（前書き）

「ロードロードまつり、6話更新です……」

第6話・生活魔術士見習い、なんとかする

「しかし、もうちょっと気の利いた声のかけ方できなかつたのかと
「つまり、この灯火あかりを消してはいけないと……」

「アンタわけわかんねつ！」

「とても良い匂いがする……。焦げないようにしてくれ

「つアンタと話していると、私の頭の方がコケそうだよ！」

力ケルは携帯用鍋のスープをかき混ぜつつ、さらに喉を痛めさせながらも、大男ことノーリと少々噛みあわない会話をしていた。

今夜の食事は猪モグの肉と薬草を煮込んだスープ。

セキとモエギが狩つてきたのは若い猪モグで、セキが手際よく解体し、力ケルが肉を発酵術でほどよく腐らせ、骨は出汁だしに。疲労回復、胃の働きを助け消化を良くする効能の薬草と、保存瓶に入れた香辛料スパイスで調理した。ノーリだけは呆けたようにテキパキした作業を眺めていた。

セキは夜食の出来栄えを気にしつつ、力ケルとノーリのやり取りを黙つて見守つていた。二人の会話の押収の流れについていけなかつたともいうかもしれない。しかし、このやり取りからノーリがなぜノエの森に独り脚を踏み入れたのか経緯が分かつた。

大男の名はノーリ・ノイエンドルフ。ナイト爵を受勲したばかりで、今は各地を巡り見聞と腕を磨いている。その旅の途中で立ち寄つたドノバーグの町で、ノエ村からの救護要請を受けたが人手が割けないという自衛団に、手を貸して欲しいと頼まれた。

村長から伝書鳥がノーリの身の証になるのは間違いないし、態度

や話の内容から信頼してみると、協力をしてもらえるようにカケルとセキが提案してみると、即座に了解してくれたのでカケルとセキは自己紹介をし、経緯も話した。

危険なノエの森を進んだ理由は、カケルたちと同じ結論からだつた。自衛団から森について情報を得ていたので、からうじて赤主と遭遇することは無かつたものの、森歩きに慣れていなかつたらしく森から出られなくなつて彷徨つていたといつ。

出会つたときの感動は生涯忘れないだろう。感動しているとは思えないような無表情でそう言い、ノーリはカケルの両手を力いっぱい握り包み込んだ。ボキボキと鳴つた両手の痛みに悶絶したカケルはなんとか自己治療を果たした後、血が上つた赤ら顔で槌を振り回しノーリを追い回した。

セツトした金属板^{カード}は脱水術のままだつたので、目標から外れて当たつた野営地周辺の羊歯や苔は、干からびた箇所が多く見受けられる。それからモエギとセキが宥め今に至る。

「えつと、頂きましょうか」

セキは宥めるように促す。カケルは仏頂^面のまま自前の木のうつわにスープを盛り、鉄製のフォークをセキとノーリに差し出した。

「食器これだから先に食べたら？」

セキは戸惑いの表情で、カケルとスープを交互に見る。

「ですが」

「私はあんま動いてないし。どーぞ」

食べずに待つていたモエギに食べていいよと促す。戦力の面で役立たずの自分にいつもより後ろめたさを感じていた。じゃあ頂きますと食前の祈りを捧げて食べだすセキに微笑む。

スープとカケルを代わる代わる見る遠慮がちなノーリに「ろくな食事取つてないんでしょ、腹の虫もうるさいし」と片手をパタパタと振ると空腹に根負けし、食べだした。

無言で夢中に食事をする様子眺めながら、カケルは得た情報を思い出しながらこれからの計画を確認しなおす。

ノエ村は賊に占領され、村人は外に出ることができない。賊の目当ては村の食料と財産に下働きの人手確保だと思われるが、商人があまり立ち寄らない、細々と自活するノエ村に目を向けた理由が他にありそうだ。

その賊はセキの話からある程度バランスの取れた構成をしている。頭は剣の腕が立つ。火属性の呪言魔術を使う魔術士もいる。見張りに弓使いを配置し、村の中剣を扱える者数人が巡回する。下つ端も短剣をぶら下げているという。総勢七人だと思ふと教えてくれたセキを、あの状況でよく把握できたこと褒めた。まずは、賊の様子を伺い位置と動きを把握する。村人たちの状態も確認する。ノーリが加わった事で、状況によつては計画変更も考えている。

村人たちの扱いは、子供は村の教会に司祭と共に閉じ込められ、女たちは賊たちの世話をさせられている。動けない者や逆らう者は納屋に隔離され、痛めつけられて手足を繋^{つな}がれ放置される。

村人の男のほとんどは村のバリケードを作るための重労働に借り出されるが、セキを含めた森に入る獵人たち数人が集められたとう。セキは村長と獵人仲間の手助けを得て、村から脱出したため目的は分からなかつたが、賊の目当てに森の資源が含まれているのだろう。

「ふむ。森ねえ」

「本当に美味だつた……。食べたことないくらいに」

思案に耽つていたカケルはビックリして仰け反つた。いつの間にかノーリが目の前で空の器を差し出していた。相変わらず無表情のようだが、目を細め、心なしか微笑んでいるように見えた。

「ちょっと、私の分まだあるよね？」

「ノーリ様が良くなつたから、かうじて確保しましたよ。それと、とても美味しかつたです」

セキも今夜の食事に満足してくれたようで、少し照れた。空の器を受け取つてスープを継ぎ足し食事にする。ノーリがジツと見つめるので「何？」と睨む。

「…………その。森、が？」

「それは後でね」

「…………その。力ケルの魔術についても」

「それも後でね」

「…………その。今更だが有り難う」

「それは皆にもね」

「…………その」

「食事させてくんない？」

餉付けされた小熊が大きくなつたらあのよつに壊くのかもしけないな。何日も森を彷徨さまよい、髭は伸び、衣装は汚れて見る影もないが、相手は騎士なのだから不用意な発言は控えよう。セキは感想を呑み込み、火に乾いた羊歯をくべながら一人を見ていた。

モエギも食事を終えて野営地の周囲を見張りつつカケルを振り返るが、当初の頃と比べ、ノーリに警戒していな様子だった。

食べ終わつてカケルは「あくまで予想の域を出ないけど」と前置きをして言う。

「村の狩人を集めていたつて事から考へると、賊の本当の目的は森にあるんぢやないかと。んで、セキ。賊が狙うようなモノの事心当たりないの？ 例えば、滅多に取れない貴重なモノとか。そういうのつて、外では価値あつたりするじゃん？」

セキはノエの森の知識をかき集め、しばらく思案しポツリと言った。

「…………赤主の巣、でしうか。アレはちよくちよく移動しますから、

森になれた狩人でないと先んじての発見は難しいでしょう。ほら、この先にあつた泉。アレは元赤主の巣だつたのですよ。穴を掘つて巣をかけるのが習性ですから。そういう穴がこの森には複数あります。それに、赤主となるまで成長できるのは一匹だけです。狩人を集めることをしては当てはまるかもしれませんね。しかし……」

知識を掘り起こしながら述べるセキの顔色が変わった。焚き火の炎に照らされ血の気が引いていた。唇が震える。

「まさか……。赤主の卵を。今の赤主は得に凶暴性が増しているし、産卵時期に入つているとしたら。仲間を犠牲に！」

居ても立つても居られない様子で、弓と矢筒を手に立ち上がるセキを力ケルは上着をつかんで止める。事情を聞いたノーリも立ちふさがる。

「気持ちは分かるけどさ……」

セキは項垂れガックリと腰を下ろした。ならつて腰を下ろしたノーリが力ケルを見る。

「食事も終わつた……。力ケルの魔術について教えて欲しい」

力ケルは後ろめたさを感じながらも、自分は攻撃魔術が使えないと前置きして、紋章魔術専門の魔術士見習いで、戦闘では役に立たないであろうことを謝る。するとノーリは顎鬚あごひげを摩り少し思案した後、フツと微笑んで首を振つた。

「では例え……。賊の気を散らし、潜入に役に立ちそうな魔術などの心当たりは？……剣を持たぬとも、薪を割る斧や、肉や野菜を切るナイフも時として敵を切り裂く道具にもなるうものだ……」

力ケルは驚いた表情でノーリを見返した。

攻撃魔術が使えない事に落胆される事を予想していた。逆に力ケルの使うことが出来る魔術で？出来ること？を探してくれたみたいで……。

故郷のミカーヴ村では得にゲルバーハに、散々蔑さげすまれた。相対する言葉に、不覚に少し潤んだ目を伏せながら「使い方によつては無いこともない」と答えた。

出来ないことは出来ない。無いものねだりをして仕方が無い。出来る範囲で何とかする。精一杯。結果は後で付いてくるものだ。

そうだった。決めたんだった。

それに今は、ひとりじゃない。

「……村に入るなら、効果時間短いし音は防げないけど隠蔽術を直接肌に描紋すれば、敵から視認されなく出来る。安全地帯も作って救出できた村人を匿^{かくま}う事も可能かと。賊を捕らえておくなら穴掘り術もいける。刻紋灯ランプに刻んだ灯術の応用で、強い光を出す閃光術も描ける」

「十分だ。宜しく頼む。まずは村人の安全を最優先に、村に潜入し様子を伺つてこよう。可能ならば救出し安全地帯につれて来る。力ケルは結界で待機しておいてくれ。詳しい情報を聞き出すために賊も何人かは連れてくる努力をしよう。セキは狩人として身軽に動け、内部にも詳しい。同行してもらう」

「つって変わつてハキハキと告げるノーリに、他二人は頷いた。決行は夜明け前と決まり、力ケルは薬茶を入れ、ノーリとセキに明日までの英気を養つてもらおうと夜の見張りをモエギと共に引き受けた。

「あ、そいえば。ねえコレ持つてつて。セキに渡しておこうかな」寝ようと横になつたセキにポンとリュックから小袋を出して放り投げた。慌ててキャッチし、これは? と訪ねるとニンマリとカケルは答えた。

「賊の気を散らす時に使つて。それは愉快に踊つてくれるだろうか

第6話・生活魔術士見習い、なんとかかる（後書き）

誤字脱字指摘、アドバイス、感想お待ちしています

第7話・生活魔術士見習い、ペンチになる（前書き）

随分更新に間が……。

もし待つていて下さる方いたら、また来てくれたことに感謝！

第7話・生活魔術士見習い、ピンチになる

翌日。朝日を受けた空が藍の中に変わり、星の煌きが残る夜明け前。

カケルたちは、陰影が濃いノエの森から村の様子が伺える場所まで移動してきた。森を開拓して広げられた牧場の向こうの村は、薪などの木ぎれを組んで作られた大松明の炎が村のあちこちに等間隔で置かれているため、よく見えた。

「安全地帯の結界は牧場に描くことにするよ。無事に戻つてくるの、待つてるかんね」

武装を整えたノーリとセキが頷き、カケルに教わった通りに、右の拳を額の前にかざして目を瞑り集中する。かざした手の甲に紋章がホワッと淡い光。肌に描紋した隠蔽術が発動する。空氣に溶けるように一人の姿が掻き消えた。

残ったカケルは、草を踏みしめる微かな音が柵を越えて遠ざかつたのを見守つてから、上着のポケットから暗視術の掛かつた单眼鏡を鼻に掛けた。水晶レンズに入れられた鉱物魔力染料の描紋が赤く淡く輝くと、暗闇が真昼のように視認できるようになつた。これで灯り付けなくても地面に刻紋できる。身を低くし、忍び足で、ハンマーのもち手側の柄先で地面にガリガリと刻紋をし始めた。

ガシャーン、ガタン！

どうやら賊たちは村長宅に屯つてゐるらしい。濁声で怒鳴り、食

たむろ

だみ

器が割れる音が聞こえた。続いて、娘らしき悲鳴。

身動きする音さえ消していれば、肩がぶつかりそになるほど側をすれ違つても見張りの賊は気づかない。ノーリとセキは描紋隠蔽術をまとつたまま、村の中心にある村長宅の裏手までやつて來いた。

小窓の隙間から中を伺つと、テーブルに脚を乗せた賊の頭目らしき、ノーリより体格の大きい筋骨隆々とした猪首の縮れ顎鬚の男。その男の隣に立つやせ氣味猫背の頬骨の目立つ黒衣の男。抜き身の片手剣を持ち、酒氣と怒氣の赤ら顔で、地面に倒れた老人を蹴りつける手下。くの字で倒れ付す老人。

「お爺様！」

そして、老人の側にひざまずいた娘がいた。見目の良い容貌なので頭目の世話に駆り出されていたのだろう。悲痛の涙を浮かべて首を振る。深い赤褐色の長髪がフワリと揺れた。

「これ一つで充分だと？ まだ森の奥にやあ赤主の卵が残つてゐる。盗りつくすまで何度も狩人を入れる。それとも……今すぐ首切られてえか！」

晒いながら、老人をもうひと蹴りする様子を一瞥し頭目はテーブル上の籠に手を伸ばして麻布をのけた。布の下には手のひら大の細く赤い筋が這う薄紅色の卵が一つあつた。

「頭目）。これ一個で金貨一枚なんすよね。巣にはまだ沢山あつたから、ボロ儲けっしょ」

「卵一個持つてくるためにもう一人も……！ なのに！」

うつむいて呟いた娘の一言。頭目は卵を籠に戻すと、テーブルの上の豪勢な食事を一気に払い落とした。床に食事が飛び散り、金属の食器が耳障りな音たてた。娘の襟首をつかんでテーブルの上に放り投げ押さえつける。口元が歪んだ。

「ローザ！」セキは声無き声で叫んだ。ビリビリと布を裂く音がした。次の瞬間には、正面玄関入り口へ駆け、見張りの手下を射た。急所を貫かれ仰け反り倒れていく賊を押しのけ、扉を開け突入してしまった。描紋した隠蔽術は急な動きをすると魔術効果が解ける。術が消える。

ノーリはフツと嘆息してセキの後に続く。こう派手に動いたからには、すぐ賊は集まつてくるだろう。敵をなるべく減らしておくことにしよう。

「キン。鞘滑りの音。」二マム（二メートル）の背丈に近い長さの両手長剣抜剣するや否や、駆けつけた賊の短刀が宙を舞つてもち手を切りつけられて倒れた。刹那の攻撃だった。ノーリが次のターゲットを沈めた後に、思い出したかのように短刀の男は悲鳴を上げてのた打ち回った。ノーリの紋章も消えて姿があらわになった。

開け放たれた扉をチラと見るが、踏み込まずに戸口前に陣取った。ヒュッ。民家の屋根から飛んできた矢を切り、腰に帯びていた短刀を投げつけて弓使いを落とす。細めた目には怜俐な光。平坦に咳く。

あと三人

「あゝ。腰しんど」

ノーリたちが村内部を偵察をしている頃。

刻紋し終えたカケルは、ハンマーを杖代わりして腰を折つたままトントンと拳で叩き出来栄えを眺めた。モエギは身を低くしたまま、

「クウ？」と小さく鳴いてカケルを見つめる。

「ん、完成。発動！」

バイロ

牧場の地面の刻紋がヒュンと微かな音を立てると、フツと力ケルとモエギの姿が搔き消えた。外部からは知覚されない？安全地帯結界術？だ。刻紋は淡い黄色に輝いている。

「ハツハツハ。良い仕事したー！ これは防犯・収納系生活魔術、さらに、存在するモノを空間を捻じ曲げ召集する呪召魔術を組み合わせ、紋章に昇華集積した紋章結界術なのだよ！ 有事の際の避難場所を提供する事を目的として作り出された上級生活魔術で、結界の中で発動させた人物が招かないと中に入れないし。フフフ、アハハハ！」

民家一軒分の大きさもある広い円形の結界内部中心で、やや陶酔気味で大笑いする。ハミングするように『ウォーン』と遠吼えするモエギ。結界の効果は抜群で、これだけ大騒ぎしたのにも関わらず賊はやつて来ない。

ひとしきり完成度を堪能してから、ノーリたちが帰つてくるのを待つた。

が、飽きた。

手持ち無沙汰に見渡すと、牧場の隅に建つ家畜小屋に気づく。「セキが言つてたなあ。行動けない者や逆らつ者は納屋に……。確認してみるかな」

家畜小屋に行くに結界を出なければならない。賊に見つかれないように、ウエストポーチの隠蔽術の金属板カードを使って姿を消す。モエギは隠密行動に長けているので術はかけない。

一緒にソロソロと小屋に近づき背伸びして小窓から中を伺うと、体中に青あざと傷を負い、ボロボロの姿で柱に縛り付けられた中年の男が居た。他に人気が無さそうなので、モエギに斥候せきこうを任せて中に入った。

やはり男だけだった。ホッと一息ついて近づくと男は腫れた目蓋まぶたを薄く開けて無言でカケルたちを見た。

「……ロープ切って治癒します。動かないで下さい」

「……ロープ切って治癒します。動かないで下さい」
「低く囁いてモエギに警戒を任せ、短剣でロープを切り治癒力活性術カで出血する傷口をふさいだ。

「楽になつた、助かつた。俺はファオスト。この村の鍛冶職人だ。アンタは？」

節くれだつてゴツゴツとした手で手首をさすりながらカケルに質問する。カケルが素直に自己紹介をして、経緯を手短に説明するとファオストは、「賊に逆らつて痛めつけられこのザマだ」と肩をすくめてみせた。

「確認したい事が幾つもあります。賊の目的はノエの森の赤主ですよね？」

「……ああ。最初は物盗りかと思ったが。村の狩人を集めて森へ入つて赤主の卵を持つて上機嫌で帰ってきた。行きに連れて行つた狩人三人が一人になつていた。巣にあつた卵を全部もつて帰れなかつたから、残りの狩人に全部の卵を回収させると言つていた。俺は反対したが……」

ファオストは歯を噛み締め苦渋の表情をする。

「卵についてセキから聞きました。赤主の卵は森の主交代の時期に複数産み落とされ、その周期は百年に一回。その中の一つだけが主になるまで育つ。手のひら大で、細く赤い筋が這う薄紅色。割ると甘い芳香がし、中身は強力な魔力回復薬になるとか」

「ああ。主になる卵は特に強く香つて、一番強力な魔力回復効果を持つ。主の卵以外は孵化しない。主の卵が孵化して新しい巣を作るため移動する頃を見計らつて、孵化しなかつた卵を腐る前に回収して売るのさ。だが新鮮なほうが効能が高いし高値で売れる。だから賊たちは欲をかいて早めに回収したかつたんだろうな。ノエの森の狩人としての知恵は門外不出だし、狩人以外の村人は森を案内でき

ない」

村人を盾にとつて言うこと聞かせてるんだろうな。優先順位としては賊を何とかする事からか。ノーリとセキの無事を思つた。
「ところで赤主を狩る方法とか知らない？ 倒す気はないけど」「セキは村の狩人の中で一番の腕利きだ。セキから教えてもらつてないなら、無い。もしくは、倒すことが出来ないってことだろ」「ノエの森の恩恵を受けて生活する村人たちにとつて、狩人を失うという事は村の存続に関わる痛手。赤主が森に居る事実から倒すこともよしとはしていない。カケルはそこまで考えて、理由も無いのに背筋が寒くなつた。

嫌な感じ。

何か……もつと……。

しかし、その理由を考えても分からないので、目の前の事から片付けなければと気持ちを切り替える。

顔を上げるとファオストが小屋の中に立てかけられた熊手鍬くわを持ってふらつきながらも立ち上がつた。

「動けるようになったからには黙つてらんねえな。アンタのお仲間の助太刀すつか。鍛治仕事してつから、腕力には少しほ自信がある」ファオストは、ニッと笑い、力瘤を作つてポンと叩いてみせた。

「ちょ！ 大人しくしてよーよ！」

カケルは外に出ようとファオストに結界で待つように促したが了承しない。意志は固いようだ。放つておけないので付いていくことにする。ファオストの手の甲に隠蔽術を描紋して発動の仕方、効果を教えた。

モエギと一緒に外の様子を窺うかがつてから外に出た。ソロリソロリ

と全員で家々の建つ方へ向かう。

カケルは見張りの賊が立つているのを見て胸の鼓動がドクドクと

早くなつた。緊張で体温が上がり暑い。

走つてくる足音が聞こえた。カケルたちは立ち止まつた。一人の賊がやってきてカケルたちの近くに居る賊に「襲撃だ！」と告げた。見張りの賊はもう一人の賊と共に立ち去つていつた。目の前の賊が居なくなつて緊張が少し解けた。

「俺たちも行くか」

ファオストが小さい声で言う。カケルは「ハイハイ」と不承不承返事をする。

ヒュオオオ……。

風が吹いた。

見上げると空は藍が増え、見える星が少なくなつていた。

カケルは火照つた体に心地いいなと思いつつ、指に唾をつけて何とはなしに風向きを確認した。

「向かい風か。……ん？」

息を思いつきり吸い込んだ。賊が走つて行つた方から微かに甘い匂いがする。

「グルルル……」

モエギが低く唸つた。カケルは手探りで見えないモエギを探して、落ち着けと抱きしめて、怪訝な顔をして質問した。

「モエギ、なんで森のほう向いてんのさ……」

言つてから察してしまつた。

「ヤバイヤバイヤバイ！」

カケルは叫ぶと走つた。隠蔽術が解けて姿が見えたのも気にする余裕がない、といった切羽詰つた表情だったのでファオストも首をかしげながらも続く。モエギも追いつく。

カケルは甘い匂いをたどつて走りながら、ウエストポーチからカードをまとめてつかみ出した。ザラリと広げ、「これじゃない、これじゃない」選んでは戻し、また取り出しては戻しを繰り返す。

焦つていたため必要なカードを取り出せない。しかも足元不注意で転がつていた空の酒瓶に躊躇つて、カードをブチまけてしまう。慌ててカードを拾い集めた。

「アレは……お仲間か？」

カケルは顔を上げる。ファオストは民家の影に隠れながら指差した。一番大きな家、村長宅前に倒れた一人の賊。一人は血を流し腕を押さえてのた打ち回り、一人はノドを矢で貫かれている。その側にノーリが冷めたように無表情でヒタと立っていた。かがり火の灯りで血に染まつた長剣がギラリと光つた。

ノーリはこちらにすぐ気づき長剣を構えた。見つめられてカケルはゾクリと震えた。本当に、あのノーリ？

「ノーリ……」

呆然と見返していると、ゴロン。屋根から音がして見上げた。ドサリ。

「ぎいやあああー！」

カケルの前に振ってきたのは短剣でノドを貫かれた賊だった。腰を抜かす。ガクガクと震えながらまたノーリを見ると、ノーリは構えを解いていた。昨日見た無表情、だけど柔らかな雰囲気で。

「嫌あああ！」

村長宅から争う物音がして悲鳴が聞こえた。ノーリは中に入つていつた。

「腰が抜けて立てない……すまんが、立たせてえ！」

情けない声で言うとファオストはカケルを片腕でヒヨイと抱え、賊の体をまたいで戸口まで運んでくれた。カケルを降ろすを待つて

いろと言つてノーリに続いた。

カケルは涙目で倒れた賊の死体の側で、目的のカードを探し当てる。柾を杖代わりに立ち上がりて剣戟が聞こえる家の中へ一步踏み出す。すると「ウと炎の弾が飛んできた。反射的にしゃがみこんで避ける。中から焦げ臭い匂いと共に、濃厚な甘い匂いが鼻をついた。

「卵つてすごい強い匂いがする。……あ、ちょっとまって。今まさに？風上にも置けない？状態！」

消臭術のカードをかざして集中する。多目に魔力を流すとカードがキイインと振動し強く輝く。一瞬にして甘い匂いと血臭と焦げ臭さが消える。

パキン。魔力を多く込めると効果が強くなるが過剰負荷がかかる。カードが碎けた。

「ガアア！」

モエギが飛び出した。その先からバキバキと木をなぎ倒す音がした。

振り返ると、民家をなぎ倒しなら巨大な赤い蜘蛛？赤主？がこちらに向かって来ていた。モエギが足一つに噛み付く。赤主が暴れる。

「どうした！」

ノーリが出てきたので、カケルはノーリの腕を引っ張つて赤主を指差した。説明しなくともすべき事を察して、すぐノーリは赤主の下に走つた。

「ちょ！ 賊は！」

カケルは走る背に問いかける。「倒した」と返つてきたので家の中に入ると、気を失ったセキを抱きかかえたローザが居た。老人を背負つたファオストが振り向く。筋骨隆々な頭目と、ローブを着た

魔術士、手下の賊らが倒れているひっくり返ったテーブルの側にシユウシュウと焦げた卵があった。消臭術の効果でこの場も臭いが消えている。

「もう臭いしないけど……遅かったか」

苦渋の表情で咳くと、セキが目を覚まして起き上がった。ローザがよかつたと微笑んでセキにしがみついた。

「賊は……？」

「ノーリが倒したけど、主が来た。ノーリとモエギが食い止めてるセキとローザが息を呑んだ。

「セキ。赤主って倒す方法ある？」

「そんなことをした狩人は居ません……」

セキは零れ落ちた矢を拾つて矢筒に入れ、矢を弓につがえながら外に飛び出して行つた。

「ファオストさん。牧場の結界、入り口開けとくんで村の人たちを誘導して避難させて。避難し終えたら、この光球にさつきみたいに念じて空に投げて合図を。合わせて入り口閉じます。中にいる限り安全ですから。さあ早く」

淡々と説明し、上着のポケットから卵大の玉を渡す。ファオストは頷くと裏口から出て行つた。

「最悪だ」

怖さで冷や汗と振るえが止まらない。槌にすがりつくようにしてからうじて立つていて。圧倒的な攻撃性、その姿。魔物が魔物たる所以を初めて目にして悟つた。

しかし、戦っているモエギとノーリ。赤主を誰よりも知つてゐるセキの飛び出していつたときの凍つた表情が忘れられない。

「これが、外の世界か……」

力の入らない膝を叱咤して歩くと、ローザが支えて付き添つてくれた。

外に出ると薄らとした朝日に照らされて、壊れた家々と戦う姿が見えた。

雨のように降り注ぐ蜘蛛の糸を交わしながら、セキは蜘蛛の目を射抜き、ノーリは赤主の上に振り落とされそうになりながらへばりついて剣を振るい、モエギは足を狙い何度も飛び掛っていた。

まだ無事のようだが、魔物である赤主の底なしの体力と何時まで立ち向かえるか。

「セキ……、皆……」

ローザが涙を浮かべて戦う様子を見つめていた。森から出た赤主は退治しなければ村にいる人は食い殺されるだろう。選択権は一つしか無かつた。

ウエストポーチからカードを取り出した。手が震えてなかなか交換できなかつた。ローザが腕に手を添えて支えてくれたのでカードを装着することができた。「ありがとう」と言つと静かに微笑み返してくれた。

牧場の上が輝いた。光球の合図だ。

さすが職人仕事早いなどと思いつつ、槌で牧場を指し「閉じよフェアル」と唱えた。これで結界は閉じたはず。

師匠、見守つて。

スウと深呼吸して、体に入れて赤主へ。

「毎日を頑張つて生きる人を助けられなくつて何が生活魔術士だああああああ！」

朝の空気を裂くように叫んで槌を振りかぶる。

赤主の柱のように太い足がカケルを踏み潰つぶすと真上に降ろされ

た。

「シツ！」

鋭い呼気。カケルを潰そうとした足はノーリの長剣で切り飛ばされ宙を舞う。

「ガアアアアア！」

モエギが跳躍し赤主の複眼を爪で裂く。仰け反った赤主に追い討ちをかけるようにセキが放つた矢が正確に目を貫いた。

「離れて！」

仲間のフォローのおかげで赤主の真下に入り込めたカケルは槌を振りかぶって地面を打ちつけた。赤主をすっぽり覆うように光が円形に広がり……。

ゴゾリ。

赤主の下の地面が消えた

第7話・生活魔術士見習い、ペンチになる（後書き）

今話は六千五百文字くらい行きました。八千文字を予想して書いてたんですが、以外と少なくなりました。説明や描写不足を心配します。

あと、ご指摘いただいて初めて「そういうえ、縦読みできたんだつけ」と気づきました。横書きのつもりで数字とか打つてた……。前書きとあとがきは横文字のつもりで書いてます

小説ももう7話目。小説用の創作用語多いのでそろそろまとめたものをアップしたほうがいいのかなあ？ 考え中です

今話も絶賛誤字脱字指摘、アドバイス、感想お待ちしています！

第8話・生活魔術士見習い、抗う（前書き）

今話には蜘蛛の描写が多めっぽくあります。苦手な方は回避してください！

赤主を囲む魔法の線が紋章魔術を描いた。

効果が発動し内側の地面が消えた。その地面の上に居た赤主と力ケルは落ちる。即座に駆けつけたモエギ、ノーリ、セキが覗き込む。穴の底は真上から照らす星と朝の日光が届かず、闇に沈んで見えない。魔術で出来た巨大な穴だった。村人総出で掘り続けたとしても、数十日はかかりそうな深さのようだ。

「降りる」

ノーリは土穴の端に手をかけて底へ飛び降りようとするが、セキに止められる。怪訝な顔で見返すと、傍に来たモエギが穴の底を静かに見つめていた。ノーリとセキから注目され、モエギが「ガウツ」と小さく吠えた。

「深そうな穴です。落下の衝撃で赤主は少しビックリしていると思います。現状静かですから、さらに刺激を与えるのは良くないかと。様子をみましょう」

一方土穴の底では赤主がひっくり返っていた。真紅の毛に覆われた六対の付属肢を宙にうごめかせている。そのすぐ側で力ケルが壁にへばりついて青い顔をしていた。起き上がる前に何とか現状脱出をしようとするが、片腕距離にいる赤主が気になり身動きが取れないでいる。

「この穴を脱出しないと……。ハツチ君たのんだよ」

落下しても手放さなかつた槌をソロソロと構えて魔力を込めた。魔術が始動して淡く輝く。

ザザザザザザザザザザザ。

振り返ると赤主が激しく動いた。六つの肢を振り、搖れた反動で土壁を爪で引っ掛け起き上がる。ザラザラと壁が崩れて大小石混じり土が押し寄せる。力ケルは動いた肢の一つの爪に引っかかり、

叩き付けられて擦られた。

「がふつ！ かはつ……！」

土を食む。目が開けられない。青あざと擦り傷を作った。舞う土煙で咳きこんだ。カケルは槌を構えなおしてふらつきながら横壁を殴りつけた。術の発動と赤主の突進。間一髪でカケルが横穴に滑り込む。

ズズンザラザラザラ。

地上で穴底を窺っていたノーリたちにも衝撃音と土が流れる音が聞こえた。

「行く」

ノーリがしごれを切らして踏み込もうとすると、穴の底からテカテカとした白い糸が噴水のように吹き上がって降り注いだ。ノーリたちはとっさに飛び退く。落下した糸先は穴の回りに粘着した。

「這い上がつて来る気のようです。つぐ……やはり無理か！」

セキが腰に下げていた短剣で糸を切ろうとするが、刃が通らないのに粘着力があり、剥がし難い。

ギシヤアアアアギュグルルルル！ ドシンドンドンドンザザザザザ……ザザザ……フシユルルルルル。

再び吹き上がる白い糸。セキは短剣で、ノーリは剣の鞘で糸を引きはがす。黒炭色の光沢を放ち意匠が凝らされた装飾の鞘が土と糸で斑になる。しかし成果はでない。ビンと糸が引かれた。二人の視線が穴に集中する。

「赤主が穴から出てきたら、足止めしてくれた魔術士様の成果が無駄になります……。正面から戦い続ければ競り負けるのは目に見えている。どうすれば……」

セキは流れ落ちる汗を目元で拭つた。止まらない汗が目にしみる。目をこすりながらセキは穴を見続けた。

「そうだ……！ 一か八か」

セキは上着のポケットを探つて巾着結びの小袋を出して矢じりに

挿して、流れるような動作で矢をつがえ穴の底に向け照準を定めた。

「来る」

糸に絡まつた鞘から手を放して剣を構えなおしたノーリがセキの隣に並んだ。ギシリと糸が強く軋んで…… 赤主が糸を使い飛び昇つた。赤主を視界に捉えた刹那、ノーリが矢を放つた。八個の単眼が並ぶ中心で矢が刺さり、小袋が弾けた。黒・灰・黄土色の噴煙が舞う。穴の真上まで飛び出した赤主は、肢を振り回して再び穴の底へ落下していった。

「ウォンウォン！ キュウウン……」

ノーリたちが糸を引きはがしている間、穴の周囲をウロウロしていたモエギが唐突に鳴いた。モエギの鼻先に地面から手が飛び出した。地面がくぼみ、咳きこみながら泥まみれのカケルが現れた。モエギが頬をしきりに舐める。カケルは泥を吐き出しながら目をこすり、モエギにしがみついて土の中から抜け出た。カケルは腰のポーチから治癒力活性術のカードを槌の頭部に装着していたカードと交換した。装着していたカードが砕けて手からこぼれ落ちたのを見て、チと舌打ちをする。

「もうだめかと思つっていました。赤主は穴底で愉快に踊つているようです。貴女のおかげでまたしばらく考える時間ができました。……あの粉は何ですか？」

セキが穴の底から視線を外さないままカケルに問う。

「廃屋を掃除した時の大量の埃ハリと煤と、山荒あれイモの痒み成分。その濃厚なヤツ」

カケルはしゃがみこんだまま足の怪我を治癒しながら、口の端をあげた。

「芋……ですか」

セキが苦笑交じりで呟く。

「芋は偉大だ」

ノーリが頷く。

「いーもんみれたでしょ」

カケルは答えるながら一回治療を止めよろめきながら立ち上がった。半眼で土穴を見つめる。穴底からズドンズシンと赤主がもがく音が聞こえてくる。

「猶予は少ない。何か考えはあるか」

ノーリが剣を構えたままカケルの前に移動してきた。

「…………眠つてもらうか。穴に蓋をして下方に向けて保冷術を放つ。穴の中なら冷気が拡散しないからね。おあえつえ向きの氷室だよね。セキ、この方法でいけそう？」

「成功する可能性はあります。赤主の場合、冬は餌をため込んだ巣から出てきませんから。寒さに弱いと思います」

カケルは頷いて、槌に装着したカードを交換する。

「じゃあ……」

カケルの言葉が途切れる。ノーリが腰を引き寄せたからだ。カケルが立っていた場所を炎の帯が貫いた。モエギは赤主が碎いた瓦礫の間を駆け抜けて、隠れていた顎鬚あごひげの男へ飛びかかり食らいついた。

「卵は渡さねえええ！ 魔術士、皆殺しにしろおお！」

モエギを引き放そうとしながら、怒声を向けた方向の瓦礫の物陰から黒衣ロフの男が出てきた。手を組み合わせ、韻を踏んで言葉を唱える。呪言魔術士のようだ。カケルはノーリに向かつて叫んだ。

「止めて！」

ノーリは迷いなく黒衣の男へ走った。男が真上に掲げた手の先の空中で炎の輪が生まれ、見る間に家一軒囲む範囲まで広がった。チリチリとした熱と、明々と照らされ破壊された家の影が炎の輪の外へ長く伸びた。ノーリの剣が首を貫くが、体勢を崩した男の肩に反れた。血しぶきと宙で爆ぜる炎の輪。すかさずノーリが回し蹴り飛ばす。横へ吹つ飛んだ男は瓦礫に強打し沈黙した。解けた炎が散り散りになり、村の外側に向かつて降りそそいだ。

「がああああああ！」

顎鬚の男の喉笛に食らいついていたモエギが着地する。顎鬚の男は田をギラつかせ、離さなかつた斧を叩き付けたがモエギは飛び、外れる。男はガクリと地に伏せて沈黙した。

ほう。カケルはノーリとモエギの短く長いような攻防に息をついた。

「魔術士様、早く！」

振り返るとセキが穴の底へ矢を放っていた。赤主がまた這い上がろうとしているようだ。カケルは両手で槌の柄を構え魔力を注いだ。キイインとカードの震えて輝く。

「セキも離れて。オババヒト過剰負荷させるから余波ですつ「ごく寒いかもだし」カケルはセキが距離をとるのを確認してから、穴の表面部分の宙へ槌を打ち付けた。ビインと金属音と破裂音。カードが砕けて、穴底に向けて白霧のような強烈な冷気が噴射した。穴の底が霧に沈む。続けて交換したカードで蓋のよつた円形の光が穴の表面を覆つた。

「へふしつ」

カケルは泥と霜混じりの前髪を掃つて、落胆した様子で槌を眺めた。モエギが戻ってきて擦り寄つた。撫でているとノーリとセキが歩いて来た。どちらも表情に安堵感がある。セキは穴の底を見てから耳をまし、一つ頷いた。赤主は保冷術の冷氣で完全に動かなくなつたようだ。セキは周囲を見ていきます、と告げて離れた。

「どうした」

ノーリが膝を折つてカケルの顔を覗き込んだ。カケルは渋い表情で地面上に落ちたカードの欠片を摘んだ。

「ああああああもう、今日だけで何枚カード碎いたんだよ！ カードの素材も刻紋の手間もかかりまくりだよ赤字だよ！ しょうがないさ、分かつてゐるさ。だけどこの損失をどこで補えつていうのさあ……、泣けてきたよ。へへへ泥が目に染みるや……」

カケルが服の袖で目元を擦るしぐさをすると、ノーリがカケルの

腕をそつと退けて懐から布を取り出し、顎を手で支えて上向かせた。

「擦ると腫れぐふ」

「魔術士様、こいつまだ生きているようです」

セキがズリズリと黒衣の男を引きずつてきた。カケルは拳を下して男を観察してから、ノーリを見た。

「なぜ殴る」

「^{トト} 釈然としない表情で首をかしげるノーリを横目に、カケルは治癒力活性術を取り出した。

「それは置いておいて。殺してしまったかと思つたけど手加減してたの？」

「なぜ殴る」

「頭つぽい顎鬚男はモエギが容赦してなかつたから、話を聞く要員が必要だつたし……まあ注意してれば呪言魔術も使えないでしょ？」

「なぜ殴る」

「そこに顎があるからじゃあ！」

ノーリは殴られた顎をさすりながら黙つた。カケルは黒衣の男に治癒力活性術を施した。ノーリの剣を偶然避けられなければ絶命したであろうつ怪我だ。傷は浅くは無かつた。

男の治療を済ませたカケルたちは、結界の外にいて飛び火を消していた鍛冶職人のファオストと物陰からカケルたちを見守つていたローザと合流し、^{セーフティーゾーン} 安全地帯結界術から村人たちを出した。^{セーフティ} 安全地帯結界術は雨風で線が消えない限り数日効果が残るが放置した。

「森も人も騒がしくなってきたね」

朝の淡い陽の光を正面から受け、眩しさに目を細める。時折身震いする冷たさの風が吹いてくるものの、沈黙していた家畜や草むら、森の生き物のざわめきも戻ってきた。

村人たちが崩壊していない建物をしばしの村人たちの生活の場として整えるために動き出す。赤主に村を半壊させられ、元の生活ま

で回復するのにしばらくかかるものの、賊たちに怯えることが無くなり、表情晴れやかに働いている。カケルたちは恩人として崩壊していない家のスペースを貸し切りで寝床として提供してもらった。教会の中の祭壇前で村人がシーツを広げて寝床を作ってくれたのは感謝したが、神様には今日だけお許しいただこう。お互い顔を見合わせて苦笑してしまった。そして泥のように眠った。

第8話・生活魔術士見習い、抗う（後書き）

お待たせしました（待ってくれてる方いるかわかりませんが……）。やっと続き更新です。半年ぶりの執筆なのでいろいろ不安ですが、少しでも暇つぶしになって、楽しんでくださると嬉しいです。半年ぶりの洗礼（誤字脱字、指摘、アドバイスなど）よろしくお願ひします！……少しだけ良いところもあれば書いてくれると励みになります……（小声）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8562/>

生活魔術士見習いカケル！

2011年4月3日22時55分発行